

### 【旧約聖書日課】 エステル記 4章10節～5章8節

4<sup>10</sup> エステルはまたモルデカイへの返事をハタクにゆだねた。<sup>11</sup>「この国の役人と国民のだれもがよく知っているとおりに、王宮の内庭におられる王に、召し出されずに近づく者は、男であれ女であれ死刑に処せられる、と法律の一条に定められております。ただ、王が金の笏を差し伸べられる場合にのみ、その者は死を免れます。三十日このかた私にはお召しがなく、王のもとには参っておりません。」<sup>12</sup> エステルの返事がモルデカイに伝えられると、<sup>13</sup>モルデカイは再びエステルに言い送った。「他のユダヤ人はどうであれ、自分は王宮にいて無事だと考えてはいけません。<sup>14</sup>この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」<sup>15</sup> エステルはモルデカイに返事を送った。<sup>16</sup>「早速、ササにいるすべてのユダヤ人を集め、私のために三日三晩断食し、飲食を一切断ってください。私も女官たちと共に、同じように断食いたします。このようにしてから、定めに反することではありますが、私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟でおります。」

<sup>17</sup>そこでモルデカイは立ち去り、すべてエステルに頼まれたとおりにした。

5<sup>1</sup> それから三日目のことである。エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で王宮の入り口に向かって王座に座っていた。<sup>2</sup>王は庭に立っている王妃エステルを見て、満悦の面持ちで、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の先に触れた。<sup>3</sup>王は言った。「王妃エステル、どうしたのか。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」<sup>4</sup>エステルは答えた。「もし王のお心に適いますなら、今日私は酒宴を準備いたしますから、ハマンと一緒ににお出ましく下さい。」<sup>5</sup>王は、「早速ハマンを来させなさい。エステルの望みどおりにしよう」と言い、王とハマンはエステルが準備した酒宴に赴いた。<sup>6</sup>王はぶどう酒を飲みながらエステルに言った。「何か望みがあるならかなえてあげる。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」

<sup>7</sup>「私の望み、私の願いはと申しますと」とエステルは言った。<sup>8</sup>「もし王のお心に適いますなら、もし特別な御配慮をいただき、私の望みをかなえ、願いをお聞き入れくださるのでございましたら、私は酒宴を準備いたしますから、どうぞハマンと一緒ににお出ましく下さい。明日、仰せのとおり私の願いを申し上げます。」

### 【使徒書日課】 使徒言行録 13章13～25節

<sup>13</sup>パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。<sup>14</sup>パウロとバルナバはベルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。<sup>15</sup>律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆

のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。<sup>16</sup>そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。<sup>17</sup>この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。<sup>18</sup>神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、<sup>19</sup>カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。<sup>20</sup>これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。<sup>21</sup>後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、<sup>22</sup>それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』<sup>23</sup>神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。<sup>24</sup>ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。<sup>25</sup>その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から来られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

## 「エステル」を記念する【こども説教のために】

皆さんにとって大切な「記念日」は、何でしょうか。多くの「記念日」は、誰かと共に祝います。互いに共通の記憶に基づいて記念するものだからです。それは、世代を超えて受け継がれる「記念日」となることもあります。

ユダヤの人々が2~3月ごろに「プリム祭」と呼ぶ祭を祝うことで記念してきたのは、「エステル」の物語です。エステルは、紀元前5世紀のペルシア帝国の支配の時代に、ユダヤ人でありながらペルシア王の王妃となったとされる女性です。彼女は、早くに両親を亡くし、親戚のモルデカイが親代わりでした。ところが、王が新しく選ぶ妃に指名されたのです。ある日、王の高官ハマンがモルデカイのことを妬んでユダヤ人を皆殺しにしようと謀り、王の命令を取りつけます。これが陰謀だと気づいたモルデカイは、エステルにこのことを知らせ、この命令が実行されないよう王に願い出させることにしました。その結果、エステルの願いを聞いた王は、ユダヤ人が皆殺しにされないよう、新たな命令を出すことにしたのです。モルデカイは、エステルに、「あなたが王妃とされたのは、この時のためだったのだ」と教えたのです。

「エステル」を記念するとき、わたしたちは、自分の人生の中で「この時のために今の自分がある」と言えるときを見いだすようになるのです。それは、神がわたしたちの人生に計画してくださっていたことなのです。

## 「洗礼者ヨハネ」を記念する

『旧新約聖書』は、わたしたちに多くの信仰者の物語を伝えています。「エステル記」のように、初めから「物語」として完結する読み物として著されたものだけでなく、ユダヤの人々や弟子たちの教会が口伝てに語り継いできた先達の身に起こった出来事が、『聖書』の中に記され、記念されてきたのです。その中には、記念日が定められてきた者もあれば、公に記念されることが滅多にない者も含まれます。しかし、そのすべてが一つの『聖書』の中に収められ、「神のお語りくださる物語」として聞くようにされてきました。そこに記された人々が一人残らず、神のご計画の中に人生を生きられた者たちであることを、わたしたちが知るようになるためです。

主イエスの十二弟子に並んで「使徒」とも呼ばれるようになったパウロ（パウロ）は、バルナバと共にシリア州の教会から派遣されて、各地のユダヤ会堂で教えるようになりました。そのとき、彼は、『聖書』に伝えられてきた古い時代の有名無名の先達の物語を思い起こさせることから、語り始めました。具体的な名が挙げられずに故事に触れられるときにも、『聖書』に親しんでいた聴衆は、それが誰の物語として記念されてきた出来事なのか、すぐに理解したことでしょう。

ピシディア州の会堂で教えたとき、パウロは、『聖書』の中から多くの先達の名を挙げはしませんでした。ただ、「預言者サムエル」と、サムエルによって油注がれて王位に着いたとされる「サウル」と「ダビデ」の名だけを挙げています。それに続いてパウロが挙げたのは、「イエス」の名であり、「ヨハネ」の名でした。この二人は、パウロらの時代に用いられていた『聖書』に記されている人物ではありません。パウロらと同時代の人物です。同時代の人のことを、しかし、パウロは、『聖書』に記された先達を記念するのと同じように取り上げ、その身に起こった出来事を記念するように教えたのです。

パウロがここで「ヨハネ」を取り上げたのは、「主イエス」のことを語る上で不可欠であったからです。

先に挙げた「ダビデ」の物語を語るのには、「サウル」の出来事を語ることに欠かせませんでした。サウルが王とされたこと無くして、ダビデが王とされることはなかったからです。サウル王の評価がどうであろうと、サウルが王として立てられたことも含めて、すべてが神のご計画の中にあったこととして語られるときにこそ、ダビデの王としての事績もすべて、神のご計画の中に置かれていたこととして語り得るのです。

主イエスの宣教活動は、「洗礼者」ヨハネとの出会い無しに始められることはありませんでした。ヨハネから洗礼をお受けになられ、ヨハネの進んだ道を後から踏み固めるようにして、主イエスは歩み始められたのです。

## 「人生」を記念する

洗礼者ヨハネは、当時のユダヤの人々の間でも大変な人気の宗教家であったと伝えられています。多くの逸話が、人々の間で語られていたことでしょう。ヨハネは、人々の間から「預言者エリヤの再来」と噂されていたということです。『旧約』で物語られている預言者エリヤのさまざまな逸話、あるいは、エリヤの弟子であった預言者エリシャのさまざまな逸話に似た、奇跡的な逸話が少なからず知られていたとも考えられます。けれども、初代教会がヨハネの出来事を語る時、それらの逸話を片端から挙げていくようなことはしませんでした。むしろ、ただ一つのこと集中して、ヨハネの出来事を語ったのです。それは、彼が「主イエスの世に現れるためにこそ、その働きに召されていた」ということです。

主イエスが、どのようにして洗礼者ヨハネと出会われたのか、詳しいことは分かりません。ただ確実に言えることは、ヨハネが、主イエスに洗礼を授けたときに、「この時のためにこそ、自分は洗礼を授ける者として人々に知られるようになったのだ」と悟ったであろうことです。いいえ、彼自身がそう悟ったというよりも、その出来事を見聞きしたヨハネの弟子たち、主イエスの弟子たちが、そう理解したのです。ちょうど、王妃エステルの身に起こっていることを、モルデカイが代わりに「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」と告げて聞かせたように、です。

わたしたちの人生の中にも、「その時」があるはずで。神がご計画くださった「その時」のためにこそ、わたしたち一人ひとりには、命が与えられ、人生が導かれ、今があるのです。「その時」は、すでに歩んできた人生の中に刻まれていたかもしれません。「その時」は、これから歩んでいく人生の中に刻まれることかもしれません。いずれにしても、「その時」はあるのです。

自分に与えられた「その時」を自ら見定め、語ることができるならば、何と幸いなことでしょう。けれども、わたしたちは皆、自分のことについても、神のことについても、鈍感なのです。それでも、そのようなわたしたちに、「その時」を気づかせようとしてくれる存在がいます。『聖書』に物語られる先人の「その時」を繰り返し聞き直す営みに加えられている、信仰の友です。主の日の教会に集められて来ている、祈りの友です。

その中の一人が、自分では気づかないでいる「その時」を、あなたに代わって告げ聞かせてくれるでしょう。あなたは、その中の一人に、本人が気づかないでいる「その時」を、代わりに告げて聞かせるのです。わたしたち一人ひとりの人生に与えられた、高い地位でもない、確実な財産でもない、名誉や人々に知られることでもない、「その時」が、どれほど貴い意味を持つものであるのか。わたしたちはここで繰り返し記念し、心に刻むのです。